

シェリダンを探して

Searching for Sheridan

INTRODUCTION

東知憲=文
Text by Tomonori Higashi

時代は、うねりの頂きでさまざまな人を生み、キャラクターたちが結集する特異点が数多く生まれてきた。60年代から70年代のサンフランシスコはまさに世界文化のなかの特異点であり、何度も再評価や再引用がなされてきた感がある。そして、『ザ・カーティス・クリーク・マニフェスト』は、70年代サンフランシスコ・カルチャーのど真ん中にいた元クライマー、フライフィッシャー、コミックアーティスト、「社会が勝手に押しつけてくる労働倫理の宿敵」を自認する男が、アンダーグラウンド感たっぷりに描き上げ、本流の中に投じた石つぶて。その小さな石は、刊行後50年近くを経た今でも、素手で掴まえられたフライフィッシングの本質ゆえに、影響力を失わない。

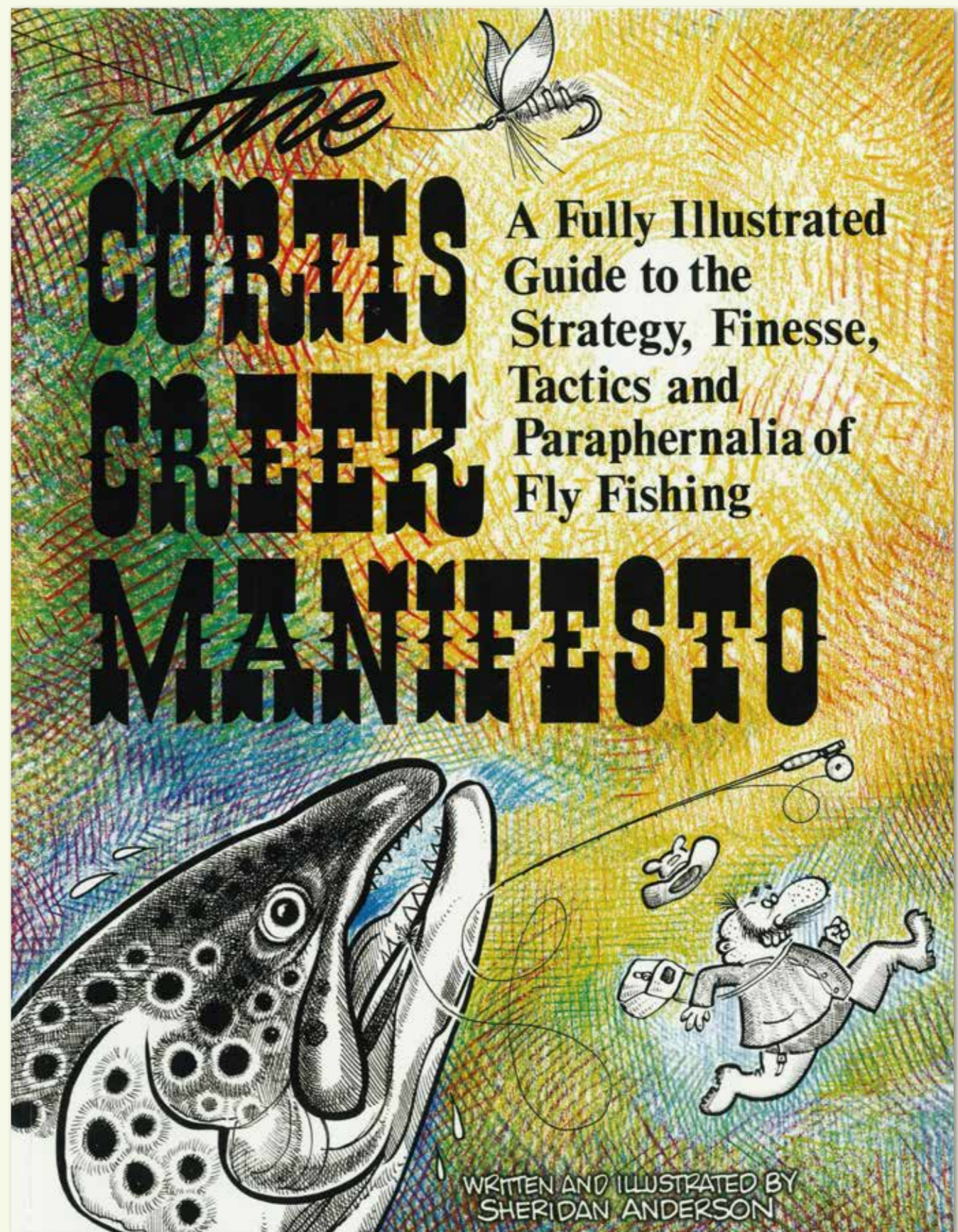
多くの人にとっては言うまでもないことだろうが、現在も晶文社から販売されている『フライフィッシング教書』は、シェリダン・アンダーソンの『ザ・カーティス・クリーク・マニフェスト』の翻訳をパート1とし、田淵義雄さんが日本のフライフィッシングのために執筆された補足であるパート2およびパート3(230ページ中じつに160ページ)を加えて構成される。私が持っているのは1986年の12刷めであるが(1979年に買った初版本はバラバラに自己分解してしまったので処分)、それ以降も安定して版を重ね、しばらく絶版になるも2021年に再刊。すばらしいことだ。

同世代フライフィッシャーの多数と同様、私も『教書』を体験して成長してきた者である。日本の読者を対象に出版された具体的なガイドブックとして『教書』が果たした役割はじつに巨大であり、その後の時代、フライフィッシング文化はかなりの豊かさをもってこの地で花開いた。しかし圧倒的に情報が少なかった1970年代後半、なんとしても西海岸フライフィッ

シングの世界を日本の釣り人に紹介したいという意気に溢れた『教書』は、時代の文脈のなかで捉え直さなければならぬだろう。田淵さんが執筆された第2章と第3章の記述のなかには、現代フライフィッシャーの常識から外れた点もあるし、翻訳の間違いもいくつか存在する。

米国の書店や釣具屋で、オリジナル版の『マニフェスト』を手にとった人は、その大きさと薄さに驚かれることが多い。99.9%が手描きのイラストと手書き文字であることにも気づくだろう。これはもともと、アンングラコミックスの手法で描かれた入門絵本なのだ。シェリダンの仲間たちが、地下向けにどんな漫画を描いていたのかを原書で知るのとはとても難しくなってしまうが、たとえば Zap! Comics と Google 検索してみれば何号ぶんかの表紙は見られる。そしてフライフィッシングのターゲット層は、コミック雑誌を喜んで読む人たちはかなり違うであろうことを予想できたシェリダンが、猥褻さや実験性を控えめに、漫画の軽みという域内にとどめておいたことが、結果としてこの絵本の普遍化に貢献したのだと私は信じている。

アマト・ブックスからいまも11ドル95セントで出ている『ザ・カーティス・クリーク・マニフェスト』を手でできれば、原著の大判サイズで、絵と手書き文字の完璧に近いバランスを体験できるだろう。くすつと笑えるキャラクターたち。シンプルだけに永遠。絶妙に挑発的。じゅうぶんな蒸留作業の仕事を経て到達されたシンプルさは、永続性と地続きだ。手描き看板が街から消えてしまった現在だが、シェリダンが、欧州とは違った経路の発展を遂げようとしていた米国内70年代フライフィッシングの雰囲気を取り取って残してくれている。



ウエスタン感にあふれた手書き文字がすばらしい表紙。それと比べ、出版社が便宜的に入れた右端6行の文字の味気ないこと

シェリダンを探して

Searching for Sheridan

1975年の冬、オレゴン州ポートランドで釣りの出版社をやっているフランク・アマトのもとに、売り込み原稿が送られて来た。すべてコミックタッチで描かれた、48ページの入門書。アマトはこう述べている。「ただちに気に入りましたよ。ユーモアも、直球なところもすばらしかった」。差出人の住所はサンフランシスコで、封筒の中には筆者シェリダン・アンダーソンの電話番号を書いた紙も入っていた。「普通だったから手紙で対応したんですが、とても興味を持ったので電話をかけ、サンフランシスコまで会いに行つていいか、聞きました」。

筆者と会うために飛行機に乗るといっなのはフランクにとって初めてだったが、その週のうちに彼はサンフランシスコ行きの便を押さえていた。「シェリダンはそうとう目立つ存在でしたよ。空港に迎えに来てく

れた彼は、黒のロングコートを着て、黒のハットを被っていました。ジョン・シルバートのイメージそのもので、同じように、足までひきずっているんです」。

彼らはミッシオン地区にあったシェリダンのアパートで本の話をしたが、フランク・アマトの心は決まっていた。サンフランシスコで筆者と会った彼は、ポートランドにとつて返すと、ただちにシェリダンへ契約書を送った。そして翌年に出版されたのが『ザ・カーティスクリーク・マニフェスト』である。ただちに人気を集めたこの本は、フライフイッシング入門書の新たな定義となつた。独自の、挑発的な地下コミック・スタイルで描かれ、歴史あるこの遊びを魅力的に、楽しそうに、斬新に紹介してみせた。ア・リバー・ランズ・スルー・イットが全世界で上映される16年も前に、新鮮な息吹きとして若きアングラーたちを刺激したのである。

「最初つから順調に売れましたね」とフランクは言う。1980年までにドイツ語と日本語に訳され、とくに後者は爆発的ヒットとなつた。少なくとも20回は重版され、何10万部も売れたという。「あの本は、純粋な彼の作品なんです。レイアウトで修正したところはないし、文章も99%オリジナルのまま。すべて手描き、真の達人でしたよ」。

「後で聞いたんですが、いかがわしいロッククライミング漫画を描いていたこともあつたらしいですね。しかしこの本が世に出る前に、シェリダン・アンダーソンの名前を聞いたことがある人は、フランクも含めてほとんどいなかった。『マニフェスト』はシェリダンが最初に書いた釣りの本であるが、好評だったにもかかわらず続編はない。『マニフェスト』が出版された時、かれはクライミング誌『サミット』に10年以上寄稿するイラストレーターだった。故ロイヤル・ロビンズが書いたハウツー本2冊にも絵を提供し、『アセント』『マウンテン』『マウンテン・ガゼット』各誌にも登場。相当地に『アンダーグラウンドで挑発的な』『ヴァルガリアン・ダイジェスト』という同人誌にも、ラブジョイ・ウルフィンガー三世というペンネームを使って描いている。

教授兄が言う。 「本は読んだのか？」

「一度か二度、いつしよに釣りに行きました。私はだいたい、イトのものつれを解いているだけでしたが、彼はずっと姿勢を低くして、這い回ったり魚に忍び寄つた

私が最初に手にした『ザ・カーティスクリーク・マニフェスト』は、年寄いた大学教授からのプレゼントだった。彼はあまり熱心な釣り師というわけではなかったが、思うところがあつたらしい。フライフイッシングを始めたんですよと私が言うと、彼はなにかを捜して書庫へと入つていった。しばらくすると教授は手を止め、懐中時計の構造と、それが太平洋を股にかけて冒険家たち(たとえば彼の遠縁にあたるクック船長など)に与えた影響を長々と講義した。話し終えると、思い出したようにまた捜し物にかかり、くたびれた小冊子をやつと引つ張り出した。彼はそれをたんに「本」と呼んだ。

その夏、オレゴン州ブレイリーシティの実家に帰った教授は、私を招いてくれた。ストロベリー・マウンテンの川を釣るといふ計画だ。教授が持ってきた道具は、フェルールが避けた古い竹竿に小さすぎるリールをガムテープで留めたもの。

彼の兄は、古いコルト・ネイビー拳銃を腰に下げた片腕の機械士だ。ブレイリーシティに滞在していた彼は、ポートランドからやつてくるシティ派フィッシャーマンがあまり好きではなかった。時代物のコルト・ネイビーは弾がでなかったが、1969年の「ベンチャー・ワゴン」という映画で使われたものらしい。主演のリー・マーヴィンが、カメラの前でそれを見せびらかすような場面があると彼は言った。

シェリダンは、ネバダ州のリノ、カリフォルニア州のビショップ、ユタ州のソルトレイクシティなどを経て、ヨセミテのクライミング・シーンへとたどり着いた。1936年にロスアンジェルス郊外で生まれ、ユタで育つた彼にとつて、人生の2つの目的は釣りと絵だった。彼の弟であるマイケル・アンダーソンはこう振り返れる。「シェリダンは、相手の心を掴まえることができたんです。子供の頃でさえ、魔法のような筆遣いで、いまにも絵から飛び出して来そうな人の姿を描いていました」。

「二度か二度、いつしよに釣りに行きました。私はだいたい、イトのものつれを解いているだけでしたが、彼はずっと姿勢を低くして、這い回ったり魚に忍び寄つた



1967年サンフランシスコにて、31歳のシェリダン。家の壁に描かれたイラストももちろん彼の作品

偉大なる奇人の断片的逸話

Fragmental Anecdotes around Curtis Creek

ブレット・トールマン=文
Text by Brett Tallman

エド・クーパー=写真
Photography by Ed Cooper

東 知憲=訳と脚注
Translation by Tomonori Higashi

その夏、オレゴン州ブレイリーシティの実家に帰った教授は、私を招いてくれた。ストロベリー・マウンテンの川を釣るといふ計画だ。教授が持ってきた道具は、フェルールが避けた古い竹竿に小さすぎるリールをガムテープで留めたもの。

彼の兄は、古いコルト・ネイビー拳銃を腰に下げた片腕の機械士だ。ブレイリーシティに滞在していた彼は、ポートランドからやつてくるシティ派フィッシャーマンがあまり好きではなかった。時代物のコルト・ネイビーは弾がでなかったが、1969年の「ベンチャー・ワゴン」という映画で使われたものらしい。主演のリー・マーヴィンが、カメラの前でそれを見せびらかすような場面があると彼は言った。

- 1 コルト・ネイビー拳銃
型番はM1851。コルトは1836年に軍人サミュエル・コルトが創立した会社で、その10数年後にデザインされたクラシックなリボルバー。西部のガンマンに広く使われ、戦末期には日本にも入ってきています。
- 2 ベンチャー・ワゴン
英名は Paint Your Wagon。1969年制作。主演リー・マーヴィン。共演はクリント・イーストウッドと豪華な西部劇コメンタリー。
- 3 ひまわりの種
米国をはじめとする各地で、ひまわりの種は普通に食用で、スーパーマーケットなどでは落花生、カシューナッツ、アーモンドなどと同じような場所に置いてあります。ハムスター用だけではないです。
- 4 ジョン・シルバート
ステイ・イン・ザ・ランドに出てくる悪役海賊。片足は義足、肩にはオウムという設定。
- 5 ロイヤルロビンズ
いまでもアバレルブランドに名前を残す、クライミングのバイオニア。1935年生まれ。ポルトランドに住む使わないクライミングを1960年代から提唱しました。

シェリダンを探して

Searching for Sheridan

り。何をしているのか、私には理解できませんでした」。

アンダーソン家に釣りの伝統はなかったが、結婚によって縁者になったグラント叔父はそれを愛した。「シェリダンはほんとうに叔父さんを尊敬していたんです」とマイケル。「グラント叔父は、あきらかに大半でつちあげの話をいろいろしてくれましたが、あまりに真に迫っているもので、それが実際に起こったことかどうかは気になりませんでした」。シェリダンは釣りを教えたのもグラント叔父だ。

『マニフェスト』の謝辞には、グラント・ウィントンが写真つきで出てくる。この本で使われている写真は、筆者近影とグラント叔父の、計2枚しかない。「彼の天才なしで、この本は現実化しなかっただろう」とシェリダンは書いた。マイケルはこう言う。「彼らがやりとりした手紙をいくつか見つけました。シェリダンは、グラント叔父に共著を持ちかけていたんです。しかし彼は、これは君が独力で仕上げるべき作品だ、君ならできると返事をしています」。

シェリダンは高校を出るとユタ大学に進むが、1学期か2学期だけ通ってドロップアウトし、60年代初頭にキャンパ4へやってきた。ヨセミテ国立公園にあるキャンパ4は、車では入れない、ほこりっぽいキャンプ場だ。しかし東にはハーフトーム、西にはエル・カピタンがそびえ、アメリカン・ロッククライミングの中心地であり続けている。シェリダンは、少なくとも2つの初登

で記録したものの一人。人なつっこい彼は、60年代最高のクライマーたちのほとんどと親しかった。人の特徴をうまく読み個性を表現できた彼は、紙と鉛筆による皮肉を押さえようとはしなかった。写真家エド・クーパーはこう言う。「シェリダンほどの才能に会ったことはなかった。彼は、人の真の個性をスケッチで捉えることができたのさ」。

1966年、エド・クーパーはサンフランシスコの証券会社を退職、ヘイト・ストリートにあつたアパートに転がり込む。そこは旅するクライマーたち、クソリに惹かれてこの町にやってきた人、そこからじゅうにいるはみだし者たちにとつての仮の宿。シェリダンもそこにいた。エドはこう振り返る。「人の出入りは激しかったな。でもシェリダンと私は住み続けた」。彼らは友達になり、腰を落ち着けて住める場所を探そうと決めた。そしてヘイト・アシユベリー地区の端っこに、かつてレストランだった建物がアパートとして貸し出されている物件を見つけ出す。「デリとして使っていたときの椅子や机がまだ置いてあつて、完璧だと思つたよ」とエド。

シェリダンはその物件を「6番通デリカテッセン&コミュニケーション」と名付けた。

ダイニングエリアにはシェリダンがイゼルを置き、キッチンにはエドが暗室として

に参加した。1964年のアンディーズ・インフェルノ登攀と翌年のアーンスト・フアン・パントリー登攀だが、彼は決してエリートクライマーとはいえなかった。

それに比べ、バタゴニア創業者のイヴォン・シュイナードはエリートだった。シェリダンがアンディーズ・インフェルノを登つた年、シュイナードは固定ロープを使わずにエル・カピタンのノース・アメリカ・ウォールを初登攀したグループの一人となり、翌年はミユア・ウォールを登るといふ快挙をなしとげる。しかし若いシュイナードは、カリフォルニア州バーバンクの会員制ゴルフコースに作られた池に忍び込んでブルーギルをねらうほどの釣り好きだった。多くの人がいる中、釣りをする者がたつた2人という状況であれば、その2人はいずれ出会う運命だ。シュイナードはこう振り返る。「ダートバッグング⁸している連中は多かつたけれど、私と彼以外は釣りなんてやらなかつたな。マーセド・リバーと、そのあたりの小さい川をぜんぶ釣つたよ。アップパー・ヨセミテ・フォールズとローワー・ヨセミテ・フォールズの下は、深い淵が連続するんだ。登るのは簡単だから、懸垂下降しながら釣つたもんだよ。35cm級のニジマスが釣れたけど、滝を越えてきた魚に違いはないね」。

シェリダンは、新鮮なマスをダートバッグ・クライマーたちに供給するアルバイトとともに、キャンパ4所属のアートイストとしても活動した。1986年に、ロイヤル・ロピンスは彼のことをこう書いている。「あの時代の欠点や虚飾、気取りを絵の形

使うという合意ができた。「シェリダンがなにかプロジェクトに取り組むときは、大上段に振りかぶつてやるんだ。ヤツは立って仕事をするのが好きで、巨大な木のイゼルにシートを張り、それをキャンバスとして使う。乗つてるときは画がそれをはみ出して壁にまで広がつたもんだよ」。インスピレーションが下りてこないときは、白いシートを立ったままじつと見つめていたという。「シェリダンが大酒を飲む夜もあつたなあ。そんなときはちよつとセンチメンタルになり、リー・マーヴィンの『さすらいの星』⁹を歌つたよ。大好きだったんだ。エド・クーパーは1967年から68年にかけて、およそ1年半のあいだシェリダンと住んだが、いつしよに過ぎた時間はある。私が山から帰つてくると、ヤツはちよつどロシアン・リバーやシエラに行くところ、とかヨセミテに帰るところ、つていう感じで」。

クライミング・ライターのジョー・ケルシーは、1968年の春、ヨセミテ・ロックジでシェリダンに会つている。シェリダンはキャンパ4に滞在中で、ジョーは大陸を横断する自動車旅行を敢行しているとき。同乗の友達がシェリダンの知り合いなので、いつしよに朝飯でもどうか、というわけだった。「もちろん、彼が『サミット』誌に描いていた一連のイラストは知っていたから、会うのは名誉なことだった。どんな繊細な人だろうと思つていたら、ロックジ全体に響くような笑い声を持つた

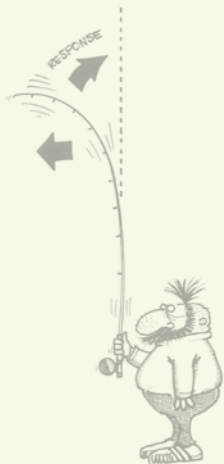
大男がやつてきた」。ジョーは、シェリダンの死後「サミット」などに描いたクライミング漫画をまとめて本を出した。ある年、ジョーがヨセミテに来てみると、シェリダンが油彩を始めていた。「ダートバッグ・キャンパの真ん中で、彼はフレデリック・レミングトンやチャーリー・ラッセル¹⁰といった西部の画家が描いた絵を模写していたんだ。風呂にも入っていないようなクライマーたちに囲まれ、松の木にイゼルを立てかけて油絵を描いていた」。

1971年、シェリダンは落ちて脊椎骨を折り、クライミングから完全に撤退する。ジョーはこう振り返っている。「ずつとぼやかされている印象があるんだけど、彼の言によれば、シエラをハイキングしているときに道から転げ落ちたさうだ。フランク・アマトは、大きな看板に絵を描いているときにはしこから落ちたのだという。クライミング仲間だったデイック・デュメは、落石に巻き込まれたと信じている。ある雑誌に掲載されたシェリダンの略歴には「ウォーレン・ハーディング¹¹がやつていたインフォーマルなクライミング・スクールに加わろうとロープなしで急いで登つているときに落ちたとある。ほんとうの原因がいつれであるにせよ、シェリダンは墜落事故の後にワイオミング州ジャクソンまで車を走らせ、ジョー・ケルシーのところへ身を寄せた。身体は、かなりやられていた。クライミングができなくなった彼は、キャンプの近くで釣りをした。スラップの上を流

る。何をしているのか、私には理解できませんでした」。



金門公園でサイケデリック・アンダーグラウンド紙「オラクル」を売るシェリダン。後ろでは、なにかのせいでノビている人も見える



- 6 ヨセミテ国立公園
言わずと知れたアメリカン・ロッキンクの聖地です。
- 7 イヴォン・シュイナード
1938年生まれ、バタゴニアおよびブラックタイヤンド創業者。創生のヨセミテ・クライミング・シエラを主導、クリーン・クライミングを提唱。
- 8 ダートバッグ
ゴミ屑の入った袋というくらいの意味で、一般的文脈で使われる場合はひたすら侮蔑的しかしアウトドアの文脈では、世間や仕事から自らを絶ちきり、ひたすらその世界を追求する人として、尊敬の意味を込めて使われます。
- 9 リー・マーヴィンの『さすらいの星』
「フランク・スター」と聞いて中島美嘉のラブソングを思い出す人もいるかもしれませんが、マーヴィンのものは西部をさすらい男の挽歌。
- 10 フレデリック・レミングトンやチャーリー・ラッセル
いずれも、西部開拓期をテーマにした油絵を数多く残した画家です。
- 11 ウォーレン・ハーディング
アメリカのヒックウォール・クライマーでダートバッグ。大酒飲み。必要に応じてクライミング・エイドを使うことも厭わなかったため、イヴォン・シュイナードやロイヤル・ロピンスらのクリーンクライマーたちと路線は異なります。墜落のしかたが教えます（森林書房はクライミング界の奇書）。



-DECEIVE - TRICK - FAKE -
HOODWINK - BEGUILLE -
ENSNARE - TRAP - CON-
BAMBOOZLE - INVEIGLE..

FISHING

LY

-DESPITE RUMORS TO THE CONTRARY,
THE PARAMOUNT OBJECTIVE IS:
TO CATCH FISH....



THUS, THE PROBLEM IS TO MAKE AN
APPEALING, NATURAL PRESENTATION
WITHOUT CAUSING ALARM. THIS MEANS
PLACING A TEMPTING FLY WITHIN VIEW
OF FEEDING FISH WITHOUT PUTTING
THEM WISE TO YOUR PRESENCE, OR IN
ANY WAY DISTURBING THEM.

FRIGHTENED FISH CAN'T BE CAUGHT!

-VIGILANT- CAGEY-
SHY- CAREFUL-
CAUTIOUS-
ALERT- WARY-
GUARDED-
WATCHFUL



THIS SIMPLE IMPERATIVE IS THE KEY TO CATCHING FISH:

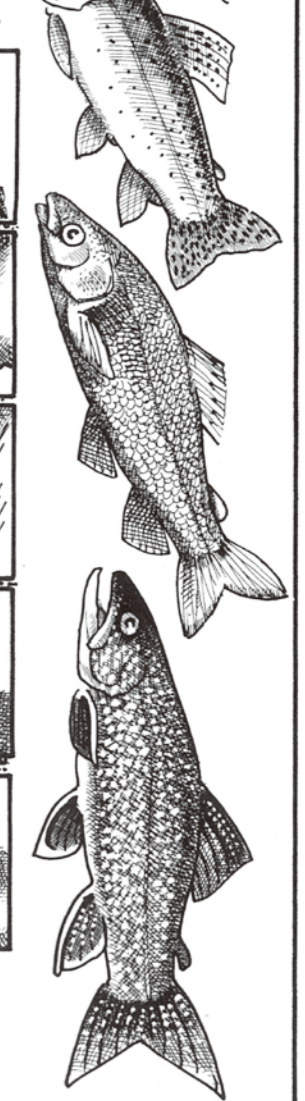
MUSN'T SCARE!



• GOLDEN
• CUTTHROAT
• WHITEFISH
• LAKE TROUT

HEAVY DUTY FISH FRIGHTENERS:

VIBRATIONS 	IF YOU CAN SEE THE FISH, THEY CAN SEE YOU.
SHADOWS 	RAPID WATER-LEVEL CHANGES
STRANGE MOVEMENT -EVEN YOUR ROD TIP 	SUDDEN RAIN
OTHER SCARED FISH 	A SLOPPY CAST
LUNKERS 	INDISCREET PICK-UP



- ETC. AND SO FORTH ...

YOU CAN'T AVOID SCARING SOME OF THE FISH, BUT THE LESS YOU SCARE, THE MORE YOU CATCH...

• BROWN TROUT
• BROOKIE
• RAINBOW
• GRAYLING

ON THE NEXT PAGE I REVEAL SOME OF THE MASTERFUL STRATEGY THAT ENABLED ME TO KEEP A TOWN OF 11,000 ALIVE UNTIL AN AIR-DROP COULD BE IMPLEMENTED..

「マニフェスト」図版をほぼ原寸で掲載してみた。デザイナー、レイアウト、カリグラフィアとしても才能が傑出していたことがわかるだろう

シェリダンを探して

Searching for Sheridan



謎のサングラス、謎の塑像。壁にはクライミング雑誌からの切り抜きが無造作に貼ってある。写っているのはティートンや聖地エル・カピタン

れる川があつて、ちいさなマスがいっぱい泳いでいて。練習にはいいんだ、シャープさを保てるからな、って言っていた。

ジョー・ケルシーは1970年代中盤にサンフランシスコに寄つたが、すでに帰つてきていたシェリダンが取り組んでいたのが『ザ・カーティス・クリック・マニフェスト』である。こんど見つけた家は、ポトレロ・ヒルにあつた、パイを8分割したような変わった形のアパート。『パークレー』で仕事をした数カ月のあいだ、泊りもなかったよ。仕事が終わつて戻ると、朝はなかつた作品が壁にかかっていた。刺激が欲しくなると、シェリダンはゴールドゲート・パーク¹²のキャスティング池か、サード・ストリートになつたウインストン工房¹³まで歩いて行つた。『シェリダンは、私が出社するタイミングに合わせてやってくるようになりまし』というの、当時ウインストンの共同オーナーであつたグレン・プラケット。1974年から75年でしょう。当時のサンフランシスコは、釣り

の一大中心地だつたんです。『サンフランシスコの釣り文化からは、すばらしいものが生まれてきました』

『ゴールドゲート・アングリング&キャスティング・クラブ、タイイークラブ¹⁴』そしてタックルメーカーが作り出す歴史。釣り場へ行くにも便利だつたんですよ。ストライ

プトバスを釣つた翌日には、ステイルヘッドをねらいに行ける。イール、スミス、マッド、トリニティといった大銘川と、海に流れ込む短い川には、サーモンのすばらしい遡上がありました。何時間か走ればシエラの溪流や、トラッキー・リバー、ホットクリークなどにも行ける。リッチで多様な釣り場に囲まれていたのです。

シェリダンはイラストをカウンターに並べ、グレンといつしよに内容を確認する作業を繰り返した。『シェリダンは本気でしたよ。いま取りかかっている本のことを、何度も話しに来るんです。愛想がよいほうではなかつたですが、私は強く惹きつけられました』

グレンがシェリダンと最後に顔を合わせたのは、ウインストンがサンフランシスコからモンタナのツイングリッジズへ引越す日だつた。道が混雑するまえの日曜の早朝で、トレーラーは工房の前に路駐してあつた。『そこにふらふらとシェリダ

グの機材を積み込んでいると『手伝おうか?』と言います。一目で、徹夜の大騒ぎ明けだということがわかりましたから『ありがと、でも大丈夫だから』と断りました。私たちが引越してしまつたうのは知らなかつたみたいでした。へんなときに必ず姿を現す、いつものシェリダンでした。グレンはそれ以来シェリダンと連絡する機会はなかつたが、やがて出版された『マニフェスト』を見て、彼がすばらしい仕事をしたことを知つた。輝いて

いますよ。釣り業界の手前勝手なああだこうだなど、ぜんぶ抜きで作つてあります。私たちが出荷するロッドすべてに無料で付けていた時期もありました。

画家ラッセル・チャザム¹⁵も、1970年代サンフランシスコでシェリダンと行きあつていて。『あの男は気に入つた。私はあの頃30代の終わり、新しい波なら何でも乗つてみようという気分だつた。シェリダンはあきらかに私と波長が同じで、『ザッブ!』コミックスに寄稿していた漫画家たち、たとえばロバート・クラムやステイプ・クレイ・ウィルソンたちと走り回つていた。私が知るなかでトップクラスに頭がよく、最高にブツ飛んでたやつらだ』

ラッセルは、モンタナ州にあるストレージスペースのなかに、アンダーグラウンド・コミックス¹⁶の巨大コレクションを保存している。『シェリダンと仲間たちがやつていたのは、表面はとってもシンプルだつた。絵もうまくなくさそうに思えるけど、ほんとうはそうじゃない。かなり洗練された実験をやつていたんだよ』

アンダーグラウンド・コミックスの作家たちの中で、シェリダンがもっとも仲がよかったのは伝説のステイプ・クレイ・ウィルソン¹⁷である。彼は2008年に頭に大けがをしたので会話が難しいのだが、妻のロレイン・チェンバレンを通じて、シェリダンとアンダーグラウンド・コミックス作家たちとの関係を話してくれた。その中には、画家のデービッド・ガイザーもいた。

12 ゴールドゲートパーク
ニューヨークのセントラルパークをデザインしたフレデリック・オームステッドやシカゴのダニエル・バーナムらのドバイスをおおむね無視して造成された大公園。1894年創設のサンフランシスコライオンクラブのクラブハウスは、ゴールドゲート・アングリング&キャスティング・クラブの建物で、公共事業促進局による事業の一端として1938年につくられた。

13 ウインストン
現在モンタナ州ツイングリッジズにあるR1 Winson社は、もともとサンフランシスコで創業、それをモンタナ州に移転したのは当時のオーナーであるトム・モーガンとクレイン・プラケットです。

14 タイイークラブ
カナダ太平洋沿岸に住むコーチャーヌス族のことばで、王を意味する『タイイ!』。キングサーモンを中心として資源保全や釣り記録の保管を行なうクラブは西海岸に散在しましたが、サンフランシスコにも現存します。

15 ラッセルチャザム
画家、作家、美食家、モンタナ州リビングスで『リビングストーン・パーク&ゲイル』のオーナーとなり、盟友の作家ジム・ハリソンらと親しくつきあつていました。画家としてのチャザムがいちばん有名ですが、『物書きとしても一流だ』と思えます。

16 コミックス
スベリングをonlineではなくonlineにする、アンダーグラウンド漫画雑誌のことになります。

17 ステイプ・クレイ・ウィルソン
ZAP! 第二号から寄稿し、大きくその方向性に影響を与えた漫画家。暴力的、猥褻かつスカトロ好みで、『何でも描いていんだ』という姿勢を貫きつづけていた。エンタも滲ませる絶妙さ。歌手シャーン・ジョブリンやピート作家アレックス・バークらとも交流。2021年逝去。

18 ウォーレン・ヒンクル
『ランバード』誌を文芸誌から急進的オピニオン誌に変身させ、ベトナム反戦を新左翼ジャーナリストとして支えた1人。ゴンゾ・ジャーナリズムの擁護者でした。

19 ハンター・トンソン
ゴンゾ・ジャーナリズムとは、先行する『ニュー・ジャーナリズム』をさらに拡大し、取材対象への没入をも厭わない姿勢を取ります。日本なら石丸元章さんでしょうが、その上流にはハンター・トンソンが躍進しています。ニュー・ジャーナリズム作家のトム・ウルフは『ライトスタッフ』で有名ですが、ハンター・トンソンのジャンキー・ルポ『ラスベガスをやっつける!』はジョニー・テップが惚れ込んでテリー・ギリアムが監督、ベネチオ・デル・トロも出演という怪作。

デービッドがシェリダンに会つたのは、サンフランシスコで1969年に開催されたコミック・コンベンションだつた。灰色熊みたいな大男が私のテーブルにやってきて、にやにや笑い、次に自己紹介をした。私は何かのボトルをテーブルの下から引張り出し、それでもう仲間になつた。私たちはみんな、ミッシオン地区のハラワタみたいな場所に住んでいた。ディックス・バーに行けばクレイ・ウィルソンと飲み仲間たちやストーリーテラーがいる。こんな近所のバーで、目がくらむようなシーンが展開しているんだ。カストロ地区にはいくつかの大きなヒッピーコミュニティがあつた。政治ジャーナリストで編集者のウォーレン・ヒンクル¹⁸もそこに住んでたよ。ウォーレンはハンター・トンソン¹⁹を連れてきたりして、まさに芋づる式よ。

シェリダンを探して

Searching for Sheridan

STALKING

-THE SNEAKY ART OF APPROACH


Books Knows

READING WATER

-THE ABILITY TO TELL WHERE THE FISH ARE...

THIS IS CRUCIAL BECAUSE IF YOU DON'T KNOW WHERE THE TROUT ARE MOST LIKELY TO BE, YOU WON'T BE ABLE TO PLAN AN INTELLIGENT APPROACH. THE HOT-SPOTS ARE CALLED "HOLDING WATER."

IT'S AN ART!



PREAMBLE AND OPENING SALVOS

TACKLE

THE FLY ROD IS THE HEART OF A BALANCED TACKLE SYSTEM THAT INCLUDES:

- ① THE ROD
- ② REEL
- ③ LINE
- ④ LEADER



FLY CASTING

"FLIP" OR SNAP CAST

IF IT'S EASY, YOU'RE PROBABLY DOING IT WRONG

THE SUCCESSFUL FISHER MUST LEARN TO CAST WELL UNDER DIFFICULT CONDITIONS AND FROM A VARIETY OF AWKWARD AND OFTEN UNCOMFORTABLE POSITIONS — DON'T BE MISLED INTO THINKING THAT BEING ANNIE OAKLEY OR WILD BILL HICKOK ON THE LOCAL CASTING PUDDLE QUALIFIES YOU AS AN ISAAC WALTON...



FLY LINE

AN OUTFIT CALLED "AFTMA" (THE AMERICAN FISHING TACKLE MANUFACTURERS ASSOCIATION) HAS SET-UP A LINE STANDARDIZATION SYSTEM THAT MAKES SELECTION VIRTUALLY PAINLESS...

ストロベリー・マウンテンを再訪する機会はまだないが、私はいまカーティス・クリークと呼べるものを持っている。同じオレゴン州のウイラメット・バレーを流れるカッタスロートの川だ。教授とは連絡がとだえ、彼がくれたあの『本』は友達に

シヨックを受けたなあ。

1984年3月31日、肺気腫の発作によりシェリダン・アンドレアス・マルホランド・アンダーソンは47年の生涯を終える。祖母ヘイゼルが最初に電話をかけたのはステイブ・クレイ・ウィルソンだった。本人はスコットランドに旅行中だったので、友人のサベス・アイルランドが伝言を預かった。「いまだにはあちゃんの声を覚えてるよ。『ウィルソンに、シェリーが死んだって伝えて』って。」

マイケル・アンダーソンはこう言う。「ラスベガスで火葬にした遺灰は、小さな箱に入れてカリフォルニアに連れ帰った。冬の間じゅう、家の中に置いておいたよ。」翌年の春、マイケルはセスナをチャーターし、ゴールデン・トラウト・ウィルダネスの上を飛んだ。そこはシェリダンが好きだった所、釣りに行き、飲み過ぎた酒を抜く場所だった。セスナはロビン・パインの滑走路から飛び立った。南部シエラネバダ山脈が落とす午後の影に、2本の滑走路が収まっていた。「セスナは、旋回して高度を稼いだ。ぐるぐる回って上昇すると、ぼんと稜線を越えてトンネル・メドウズに出たよ。」

デビッド・ガイザーはフライフィッシングが、実際にシェリダンと釣りをした経験はない。しかしシェリダンは、ステイブ・クレイ・ウィルソンにはなんとか教えてみたいと思つたらしい。デビッドの弁を引こう。「かわいそうにウィルソンは、川にかけてジャック・ダニエルズのボトルでも横に置いて、のんびりウキを見つめるんだと思つてみたんだ。釣りから帰ってきたとき、ほんとに困つた顔をしていたよ。『アイツさあ、海兵隊の新人を担当する指揮官よりもひどいぜ』って。後から、その日の釣りのことをシェリダンに聞くと、頭を振つてこう言つた。『ウィルソンは絵が描けてよかったよ』。」

1970年代後半、シェリダンは持病の肺気腫が悪化してサンフランシスコを出る。オレゴン州南部にある荒地の砂漠に、小屋を買つて引越したのだ。ウィリアムソン・リバーやスプレグ・リバーといった釣り場に歩いて行ける場所にあつたあばら屋を、彼はヴィズクイーン館²⁰と名づけた。シェリダンのようなトラウトフィッシングが心から望む、大きなレインボーやブラウンを相手にするすばらしい釣りができる環境だった。キャンプ4やサンフランシスコにたつぷりあつた、自発的でずつと続く楽しさというものが、チロクイン²¹という町には欠如していた。

「彼は集落にあるバーで、パイユート族とよく飲んでた」とデビッド・ガイザー。「小屋にやつと電話を引いたある夜、シェリダンからかかってきた。床に倒されて、頭に拳銃を突きつけられたつて。きつとウエスタン映画のジョン・ウエイン風に『おい、ちよつと話でもしようぜ』つて入つていったんだと思うよ。ちよつと控えろよ、つて注意せざるを得なかった。」

夏のチロクインは、サンフランシスコに住んだ後は気持ちのよいものだったろうが、肺気腫持ちのシェリダンにとつて冬はつらすぎた。そこで秋になると彼はラスベガスまで車を走らせ、祖母のヘイゼルといつしよに暮らした。ジョー・ケルシーは覚えてる。「ヘイゼルは元気のいい年寄りで、大通りから数ブロックしか離れていないとこに住んでいた。人生における最後の情熱はトドルスロット。シェリダンはばあちゃんの面倒を見て来ていたんだが、どつちがどつちを介護しているのか、俺たちもよく分からなかった。」

冬の間、シェリダンはヘイゼルをカジノまで送つていつて、彼女がスロットマシン遊びを終えるまで、バーでトドルスロイやチェーホフを読んで待つ。デビッド・ガイザーは言う。「夜中に大酔つ払いで電話してきて、ラスベガスなんて来なければよかったと吼えることもあつた。作業用手袋をして、右手がシュワルツェネッカーくらいもある常連がスロットを回しまくる話をしてくれたよ。もうちよつとまともな会話ができるならメンサ²²に入会してもいいくらいだ、つて言つてた。死んだつたつと聞いたときには、仲間全員が大

やつた。しかしいつでも誰かにプレゼントできるよう、手元に数冊は必ず置いてある。グッドウィル・ストア²³なら99セント出せば、この釣りを始めるための最高の入門書を買うことができる。語りたがり屋、変わり者、ほら吹き、芸術家、話上手たちでいっぱいの世界だ。「労働倫理の宿敵」を自称したシェリダンは、それらすべてを丸めて1つにしたような人間。巨大な才能を持った魅力的な変わり者で、この世を去つたのはあまりに若い年だったが、時を超越した48ページに、この変化を止めない遊びの真髄を表現してみせた。

20 ヴィズクイーン
英国製の万能ポリエチレンシート。米国ではタイベックに相当。日本でいうところのブルーシートの類です。彼の家は、雨漏りがすごかったでしょう。

21 チロクイン
1928年以来、ポリー・ラスボローがウィリアムソン・リバーの畔に住んだ町。ポリーはその川での研究をもとにダイニング&フィッシング・サファジーン²⁴を書きました。彼のアフローチはインディアン派と汎用派の中間的なものといえるでしょう。

22 メンサ
「MENS A」(メンサ)とは、1946年にイギリスで創設された、全人口の内上位2%のIQ(知能指数)の持ち主であれば、誰でも入れる国際グループです(シバメンサのホームページより)。シェリダンのな世界からもっとも近い人たちですね。

23 グッドウィルストア
メソジスト派の牧師が1902年に始めた、困窮者救済と雇用創出のための非営利事業。救世軍がやっている、スリフトストアと理念的に類似します。

シェリダンを探して

Searching for Sheridan

ここに掲載するのは、森林書房から1979年9月に刊行された『西洋毛鉤鱒釣師譚』、そして1999年につり人社刊『回想のフライフィッシャー』に転載された、シェリダン・アンダーソンを訪ねた記録である。芦澤一洋さんの短い文章の中にシェリダンの肉声が封じ込められている。本稿は『西洋毛鉤鱒釣師譚』のバージョンに準じている。



シェリダン(写真左)と芦澤一洋さん(中)。シェリダンの手にはグラス

「サンフランシスコのゴールデンゲート・パークの中にあるアングリング・クラブでキャストイングを教えているらしいよ」
前年の夏、ヨセミテでロイド・プライスももらしたひと言を頼りに、私のシェリダン・アンダーソン探しの旅が始まった。
ゴールデンゲート・ブリッジに隣接した閑静な公園、広大な敷地を分けて走るケネディ通りの奥深い森の中に、ゴールデンゲート・アングリングクラブのトラディショナルなクラブハウス、アングラーズ・ロッジがあった。庭にはキャストイング練習用の大きなプールが二面。アキュラシー用の白いターゲット・ブイがサンフラン

シスコの朝霧の中で静まりかえっていた。これでシェリダンの住所がわかるかと喜んだのも束の間、クラブでだれに聞いても、そんな人間は知らないという。なんてことだ。中のひとりが言うことには、
「……この間、つまり六月の末のことだがね、モントナのウエスト・イエローストンへ釣りに行ったんだ。なんとそれがバカ寒で、山には雪が舞うという騒ぎさ……そこでそれらしい人物が来ているのいないのという噂話をちよつと小耳にはさんだのを今思い出した。釣り？ 釣りはからきし駄目だよ」
それでウエスト・イエローストンに飛んで、また「シェリダン・アンダーソンって知らない？」を繰り返した。いるとも、いないとも……。メビウスの輪の裏表を追いかけつこしているように手応えがまるで感じられない。いらいらしているうちに日が過ぎてしまった。アイダホのヘンリーズレイク・ロッジの恋女房、ポビーが助け舟を出してくれた。
「八月にコンクレープがあつて、アメリカ中のフライフィッシャーが集まってくるから、その時に……。間に合わないのだ。」
とにかくモントナ、アイダホあたりにはないことだけがわかった。
「それにしても、なんであんな変な男を探しているの？」
とポビー。変かどうか確かめたいんだ。なんとなく胸騒ぎがするのだ。なぜかなんてわからない。会いたいのだよ！ 恋しいのだよ！ だれにもわからないよ、こんな気持ち。
「ポートランド・オレゴンでなら正確な情報が

得られるんじゃない？」
なんとまたウエストコーストへ逆戻りではないか。「岸壁の日本人」なんだ。またまた尋ね人の旅。ポートランドでフランク・アマトがパイプの煙の奥で例の柔和な目をいつそう細め、やつと確実なところを出してくれた。
「オレゴンのいちばん南、カルフォルニアとの州境近くにいるよ。クラマスのチロキンというインディアン集落さ。療養しているらしい。なんの病気？ さあ知らない。釣り好き病かな」
「連絡をとっておいでやるよ。いや、電話はない。知り合いの爺さんがいてね、言伝てを頼むんだよ」

クラマス。スチールヘッド狂いにとつてはいつも頭のどこかで共鳴している名前。その源流は南部オレゴンの平原。周囲をかこんだ海拔2000メートルの峰々から流れ出す水がクラマス・レイクへ集まってくるところからそれは始まる。ウッド・リバー、クロックド・リバー、スプレイク・リバー、ウイリアムズ・リバー、そしてあのポリー・ラスポローが住み着いてしまったエージェンシー・レイク……。
カデイスフライ#18の釣りが好きな連中に聞いたら、よだれを垂らしそうなスプリング・クリークがひしめいているデルタ地帯。一年中水量の変化することのない、その水草いっぱい流れを渡り渡ってルート97を左折するとチロキンだった。町の入口のクリークでインディアンの子供たちがにぎやかに水遊びをしていた。人口八百の小さな集落だ。だれに聞いたつてわかるはずだけど、これだけ捜しまわったんだ。

芦澤一洋が会った シェリダン

芦澤 一洋 = 文と写真
Text & Photography by Kazuhiro Ashizawa



「われこそは貴族の中の貴族、ゆえにシルクハットもあるのだ」(回想のフライフィッシャーより)

《Profile》
芦澤 一洋(あしざわ・かずひろ)
1938年生まれ。グラフィックデザイナーからアウトドアライターへと転身し、フライフィッシングだけでなく、バックパッキングも含めたアメリカのアウトドアカルチャーを紹介。ジャパンフライフィッシャーズ創立に尽力するなど、その活動はメディアだけにとどまらなかった。現在の日本のアウトドアシーンに繋がる種子を植えた人といつてよい。「バックパッキング入門」、『西洋毛鉤鱒釣師譚』、『遊歩大全』(翻訳)、『アーバン・アウトドア・ライフ』など著書多数。つり人社からは『フライフィッシング紀行』、『続・フライフィッシング紀行』などを刊行。1996年逝去。



シェリダンの自宅にて

シェリダンを探して

Searching for Sheridan

芦澤一洋が会った シェリダン

葉のマシガンが無視して家の中を探索してみた。床屋の椅子と石油缶の椅子のほかにスプリングのいかれた長椅子がひとつ。その脇に懐かしのハンディ・プレーヤー、そしてファンキージャズやシベリウス、マック・モラスのホンキートンク・ピアノなどのレコード。居間とおうか、ともかくメインの空間の一隅を占める本棚はフライフィッシングの本が占領している。

続く小部屋は仕事机が入っていてスタジオ。そこにも本棚があった。並べられている本のタイトルを読んでいるうちに、私はなぜ、シェリダン・アンダーソンに深い興味を持ち、一度はどうしても会ってみたいという強い願いを抱くようになったのか、その答を得たように思った。シェリダンについての知識といえば、R・ロビンズ本のイラスト、ハーディングの本に出てくるほんの何行かの人物評、そしてフライフィッシングの入門書、『カーティス・クリーク・マニフェスト』しかなかったのに、私のアンテナはストレートにそれが自分の肌合いにしつくりくるものであることを確信しているのがなんとも不思議だったのだが……。

私の嗅覚はどうやら狂ってはいなかったようだ。本棚にはウィリアム・パロウズの『裸のラッチ』、ケラワックの『路上』、『ダルマバム(禪ヒツピー)』、『ビッグ・サー』などといっしょにシンクレア・ルイス、メルケン、マーク・トウエインなどが並んでいた。懐かしい恋人、マギー・キャンデイと茶色の小びん、そしてジャファイ・ライダーやスミスやプリンセスたち、マローン・ブランドやハンフリー・ボガードの伝記も……。

最後は発で仕留めたかった。
町でたった二軒の不動産屋、ここなら間違いつこなし。

「ミスター・アンダーソン？ ああ、あの人ならたつた今、この窓の前を歩いていたわよ。パーボンのボトルを持って……」

あわてて外を飛び出し、白く照り返している道路を眺めまわし、突き当たりのヤブ地まで熱い視線を送ってみたが、またも幻。不動産屋のキャリア・ウーマンが壁いつばいの町内地図の前で説明してくれた。なんのことはない。窓の前の道を直進、突き当たりを左折、ワンプロック先の右側がアンダーソン家。歩いたつて数十メートル。歩いた。裏山へ登っている道だつた。どこからともなく懐かしいホンキートンク・ピアノと酒場の喧騒音が風に乗って聞こえてくる。しかし人の気配はない。確かこのあたり……。不動産屋の地図が不正確なかな。そんな馬鹿な。道路の反対側に家がある。聞いてみたが知らないという。

今度こそ遂方に暮れた。果然。坂道に立ちつくし、周囲にもう一度目をやった。ちよつとしたT字路で両方の角には小ぢんまりした家があるがそのどちらとも岸壁の日本人が探し求めている人間の棲み家ではない。突き当たりはもう丘になっていて一軒の廃屋がある。壊しかけなのか、造りかけなのかわからないが、ただ板を打ち付けただけの小屋だ。あたり二面板切れの山。どうやらホンキートンク・ピアノはそこから聞こえてくるらしい。

そのとき、さつきベルを鳴らした家のドアが開いて若い男が顔を見せた。

「そのオッサンなら、その小屋だよ」

指さすところは例のパラック。エ！ここに人が住んでいるの？

おずおずとぶざまな階段を上つて声を掛けてみた。いた！ ロッククライマーであり、アーティストであり、ワンダラーであり、フライフィッシャーであり、見せかけの倫理道徳に対する永遠の反抗者と名乗る男、シェリダン・アンドレアス・マランド・アンダーソンがそこにいた。煮しめたようなヘソ丸出しのTシャツ、ペンキだらけのズボン、油気がすっかり消えてしまつて黒のウイングチップ靴、スズメの巣の頭髪、笑いつばなしの顔、あの悲しげな目と歯、そして酒のグラス。

「小屋？ 自分で作ったよ。ここはいいところさ。ドライランドは体にいいんだ。悪いところなんてないさ。病んでいるのはオレの方じゃないもん。それより何を聴く？ デープ・ブルーベックつてのはどうだい。懐かしいかい？ クラーク・テリーのトランペットつて知ってる？ それともシベリウスがいいか？ エーと、グラス、どこへ置いたつて」

言葉と動作、そして歌と酒の休まるときはなかった。酒でふくれた腹には食い物をぜんぜん入れてないのではないだろうか。これがヨセミテの岩場に遊び、あのロイヤル・ロビンズの聖書『クリーン・クライミング入門』のさし絵を書いたクライマーの姿とは……。

次第に頭が混乱してきた。と同時にウォレン・ハーディングが『墜落のしかた教えます』の中でシェリダンを栄光のゾーン10人間と崇めているわけもわかってきた。シェリダンの言

シェリダンの求めているものが彼の青春、ピート・ゼネレーションの青春、50年代をずっと引きずっているものであることは間違いない。そしてそれは私の青春、私の反抗、私の自由、私の本棚でもあった。胸の奥が痛くなり、なんとなく涙もろくなつた。部屋にはアメリカ松のまだ生乾きの匂いが充満していた。台所らしい場所には、かつてのログ・キャビン住いのワールド・ティガーのものよりもつとみすぼらしい炊事道具がちんまり並べられていて、あの美食家、グラム・カーのクックブックと若き日のヘミングウェイの顔写真がお相伴。

キャトル・ラスラーたちが一杯やつたあとしげこむことにきまつている、あの酒場の二階の部屋をつくり仕立てたベッドルーム。その隣が便器とバススタブを置いた水場。コミックブックの山が床を占領していた。壁にはハンフリー・ボガードの顔、アフリカの女王。また胸が痛くなり、涙がじわつと浮かんできた。

シェリダン・アンダーソンは酒のグラスを置いてスコットのグラフィイト十・五フィートを出してきた。「さあさあ、ウッド・リバーへ繰り出そうぜ」と言う。「水草の影でアウンがいらいらしながら、空が夕焼けで赤く染まるのを待っているんだ。遊ぼうと呼んでいるんだ」。そんな声を無視して私は必死に、「シェリダン、あなたの求めているのは……なんて真面目な質問。「酒とレイジー、アツハッハ」

レイジーが単なる怠惰でなく、限らない自由を意味することはいうまでもない。彼の言葉、態度、生きざまが現実主義的諦観を色濃く見せているのにもかかわらず、私に

はハードボイルドでラジカルな理想主義追求者、教条や信条の代用をすべて排し、ひたすら内なる王国のアイデンティティーをさがし求めるアメリカの鱒釣りに見えてしまふのだ。だれもこの全惑星的産業主義の醜さ、ひどさにあきらめをもっているのに、彼ひとり、ほとぼり出るエネルギーをもって自身が悪の一部にならずにすむにはどうすべきかの答をひたすら探し求める正気の導師に見えるのだ。

『カーティス・クリーク・マニフェスト』でフライフィッシングでやらかしたから、次はバックパッキングさ。もうゲラ刷りはできているんだ」とシェリダンがめずらしく、まともな話しぶりをする。最終校正刷。フライバックカーの世界が、あの大胆で繊細、笑いとシリアスの混淆の中で踊っていた。

シェリダンに別れを告げる時間だつた。彼はまたマック・モラスのホンキートンク・ピアノのディスクをプレイヤーに載せ、ラトルスネークのひそんでいそうなセッジブラシの叢林の中に立つて見送つてくれた。口からでまかせの歌を歌つて……。

「日本から来た友達がもう帰つてしまふんだとヨ、寂しいナー」

ニコニコ笑いながら大声でがなり立てる声は、隣近所に響きわたっているにちがひなかった。また胸が痛くなり、涙がじわつとわいてきた。私はなぜ日本のフライフィッシャーになつたのか、バックパッカーになつたのか、その答のひとかけらがオレゴン南部、暑いインディアン部落にあつた。

田淵さんのこと。

原書『マニフェスト』の翻訳に、田淵義雄さん自身の文章を加えた『教書』。共著者としてシェリダン・アンダーソンと名を連ねる田淵さんについて、生前交流のあった黒澤一進さんに文章を寄せていただいた。

黒澤 一進=文と写真
Text & Photography by Susumu Kurosawa

(Profile)
黒澤 一進(くろさわ・すすむ)
1971年生まれ。フライ歴42年。長野県軽井沢町にてカフェ「COFFEE HOUSE SHAKER」を経営。可能な限り地元の流れでよい魚と出会うことがこだわりのフライフィッシャー。

田淵 義雄(たぶち・よしお)
1944年生まれ。作家。著書多数。1982年に長野県川上村へ居を移し、森暮らしを実践。そのスタイルは多くのアウトドアを志向する人たちに影響を与えた。家具製作家としても知られる。フライフィッシング関連の単著としては『フライロッドと人生』(地球丸)など。2020年逝去。



この本に出会わなかったら今の私は存在してなかった。初心者の方にはぜひ読んでほしい



プレゼントしてもらったお店のサインボードと田淵さんのご自宅と同じデザインで作ってもらった玄関ドア

シェリダンを探して

Searching for Sheridan

屋根が見えた時には鳥肌が立った。恐る恐る入りの鐘を鳴らすと家の中から田淵さんが現れてサンルームからリビングに招き入れてくれた。それ以来、多い時には毎週森の家に遊びに行つて家作りや店作りの相談をした。

お店の入り口のドアは田淵さんの家と同じデザインで作ってもらい、お店の顔となるカウンターとスツールはご自身で家具を作るためにサンルームで乾燥させていた国産の桜材で製作してくれた。店名のCOFFEE HOUSE SHAKERの名付け親も田淵さん。オープンの日には田淵さんの家と同じアイアンのサインボードをプレゼントしてくれた。

初めて田淵さんと釣りに行ったのは何度目の訪問の時だったろう。午後のティータイムに自家製のハーブティーを飲んでいる時にふと、今日の夕方はよきそうだね、ちよつと行こうか、と誘っていた。案内をしてくれたのは家から車で数分の秋山の小学校の前の流れ。

リビングの壁にいつも飾られている愛用のバンブーロッドには使い込まれたビンテージのフライリールがセットされていて、リーダーの先にはフライも結ばれていた。フライはもちろんCCR、コールドクリアウォーターリバイバル、田淵さんのフェイバリットパターンだ。



スツールの座面の裏側には直筆のサイン



お店の顔となるカウンター席はカウンター、スツールとも国産の桜材を使って作ってくれた



ご自宅の半地下にある工房で作業する田淵さん

田淵義雄さんとの出会いは中学1年生の時。もちろん実際に出会ったわけではなく、ベテランフライフィッシャーなら一度は読んでいるであろう『フライフィッシング教書』との出会いである。

群馬の田舎町の本屋で学校帰りにたまに見つけた二冊の本。あの日、あの時の本に出会わなければ私の人生は全く別のものになっていただろう。

物心ついた時には釣りをしていた私。山の中の生活で家に周囲には友達もなく釣りが唯一の遊びだった。実家から歩いて数分の流れにはウグイやヤマメがたくさんいて、幼い私にも釣れた。

10歳の時テレビの釣り番組で初めて目にしたフライフィッシングのカッコよさに刺激を受けて小遣いやお年玉を貯めてロッドからフライまでがセットになった安物を買った。しかし、私の周りにはフライフィッシングをやったことのある人は誰もいない。情報の少なかつたこの時代、まして小学生に分かるはずもなく、ただただロッドを振り回しているだけの日々が続いていた。魚も釣れず諦めかけていた時に出会ったのが『フライフィッシング教書』だった。

中学一年生の私にも分かりやすいシェリダンの素敵なイラストでの解説で初めてタックルの名前やラインの結び方、キャストやフィッシングやフライイングなどの基本が覚えることができた、まさにフライフィッシング

案内してくれたのは家から車で数分の秋山の小学校の前の流れ。川に着いても慌てて釣りを始めるわけではない。川沿いの土手の上をゆっくり歩いて流れのようすを伺う。小さな堰堤の流れ出しにライズを見つけると、静かに土手を降りて流れから離れた場所に跳き次のライズを待つ。2度、3度、ライズが安定してきたタイミングを見計らつてようやくフライリールからフライラインを引き出し、力みのない自然の動作でロッドを振り、ワンキャストでフライはライズポイントの少し上流にふわりと落ちた。

田淵さんは釣りの技術的な話をするとはほとんどなかった。それよりも魚の付き場や流れの読み方、川の歩き方のほうが多かった。イワナは泳ぐのが嫌だから流れの緩い所にいる。釣り人が歩いている浅い流れにいて、釣り人は自分自身でイワナを追い払つてこの川には魚がいないと文句を言う、と笑っていた。そんな田淵さんが流れに入つて釣りをしている姿をほとんど見ることはなかった。いつも膝までのニープーツで川原を静かに歩き、釣りをする時には跪いてロッドを振つていた。後ろについて釣りに歩いてみると私が釣り上がった時には気にも留めなかつた浅い流れからイワナが飛び出し驚かされた。田淵さんはメンディングをあまりやらない。それなのにフライはとても自然に流れを漂う。

の教科書だった。とりわけ熟読したのが後半の田淵さんの釣行記。いつかはこの本で紹介されている川や湖で釣りがしてみたいと子供ながらに思いを巡らせた。そのうち田淵さんご本人に興味がわき、田淵さんの本はすべて読み漁り、森暮らしに憧れた。

月日は流れ25歳になった私は縁あって軽井沢でカフェを始めることにした。店舗兼の自宅を建てる際に影響を受けたのが、ずつと読んでいた田淵さんの森暮らしの家。軽井沢に合った森の家を作りたいと思つていたそんな時に偶然、田淵さんの自宅がテレビで紹介されていた。そこに映し出された建物は私が思い描いていた理想だった。

どうしても実際に田淵さんの家を見てみたくなり、ダメモトで手紙を書いた。『フライフィッシング教書』を読んでフライフィッシングを始めたこと、森暮らしに興味を持って軽井沢に移住しようとしていることなどを書き連ねて手紙にした。住所なんて分からないから、本で紹介されていた大雑把な住所を書いて投函した。無事に届いたのかも分からず、届いたとしても返事がもたらえらると思えなかつたが、諦めていたある日、突然田淵さんから電話があり思いもよらなかつた森の家への訪問が決まった。

田淵さんは、大袈裟かもしれないが人生の師であり憧れの存在。初めて赤いトタン気になつて質問すると川の流れを見極めて立ち位置を決めればメンディングをやらなくてもドラッグなんてかからないよ、と笑つて答えた。多くを語らない田淵さんだけど実際に一緒に流れに立つと学ぶことが多かった。

日本のフライフィッシングの第一人者であり、それまで難しく敷居の高いイメージだったフライフィッシングの楽しさをわかりやすく伝えた田淵さんの功績は大きいと思う。今でもフライフィッシングを始めたいと相談を受けた時、一番に勧めるのは『フライフィッシング教書』だ。

私の人生に多大な影響を与えてくれた田淵さんは好き嫌いがハッキリした人、自分の価値観を大切に、好きなことにはことんめり込みながらいつも自然と対話をしてきた。好きな人生を好きに生きた人だと思ふ。

最後に、私が一番好きな田淵さんの言葉を紹介させていただきます。

時を無駄づかいするのは、どうしてこんなに楽しいのだろうか。

人は誰だって死んでいくまでの今日一日を暇つぶししているにすぎない。

この世で一番贅沢な時間の無駄づかい、それはフライフィッシングと、いい自然の中での読書です。